

伊13
1833
76



門 18 持
號 1833
卷 76

繪本古図記七篇卷之四

目録

徳吉院幸苑之説関白話

本村忠隆及阿波重之次議論の圖

秀次云登山高野詣

増田長盛途中より関白と

秀次云懐旧の号を詠下終小園

中徳上本村忠隆及と終小園

伏見の三俊と神山より列る圖

繪本古図記七篇卷之四

秀次之以下生官話

日圓

徳吉大膳が良き殉死せんとき日圓

畜生塚由来話

君達女房達引續されるの圖

女房達の死を嘆む圖

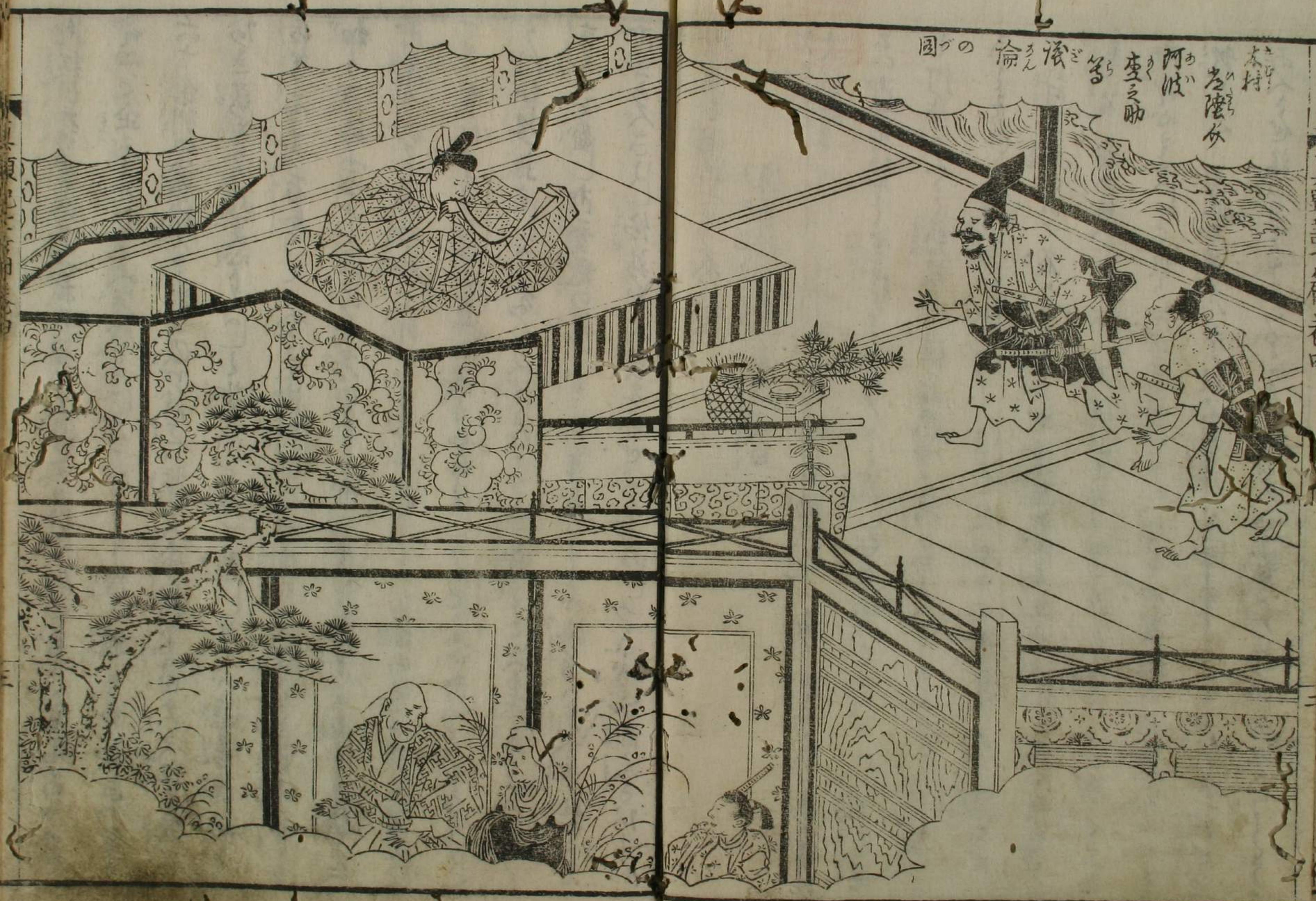
女房達の死を嘆む圖

繪本古圖記七篇卷之四

徳吉院幸苑自説関白



大福元年七月八日茶田徳吉院に在るの仰と承り聖治城より秀次
の御前におく先原をよそくと流しむせび入てゆひたる関白様
何れゆやと尋ね人の徳吉院中候と申入るるに世の中は只よ
きとそこの何きと御承りいそり殿中の御身のことと流し
と計る者のひて存るべき文より御深敷の思召はしとまらぬ種
云々申者人のいかにしめり御用ひり申せしを度くまらぬこと
御心はしまらぬ何の遠眼のしめらるぞやを問ふは杖としり
頼もぬめは御方乃々石恩儀を申出来しとて又御深敷
あへて結りて申する小孫の次女を小孫に嫁ひしことしり



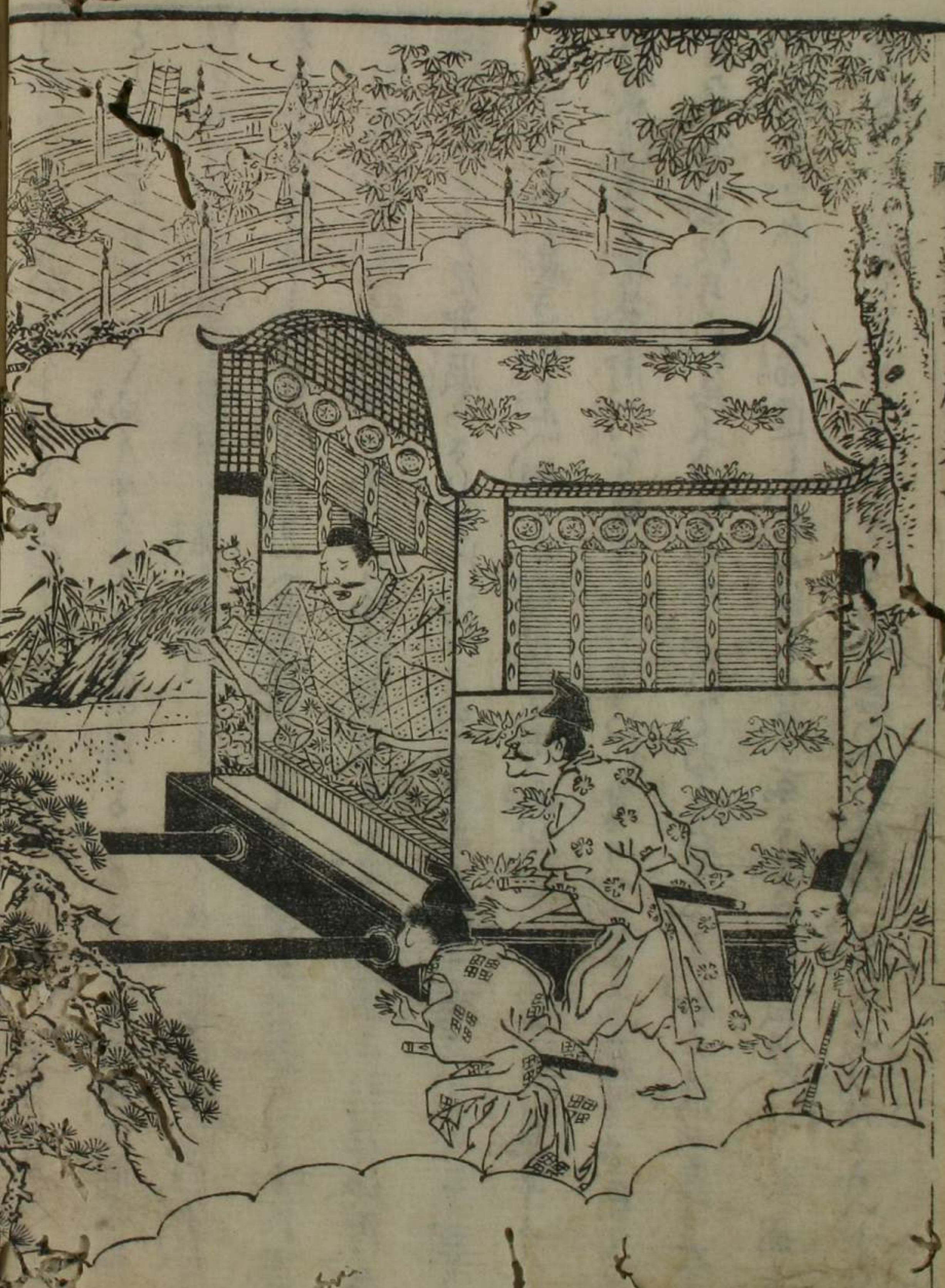
本村
老隆
阿波
左之助
後
論
の
國

真蹟也
細柳卷四

御親ひ世あるのる我を因て大君とて何の思ふるをありて死
我心と企むれたと人運心とさしてとむくも准り我より死へまや日本
六十余羽の諸神中には及びたとい梵天帝釈中には大天王も
何と病をうけ其心り内と誓いと立て除じ給へ徳音院謹
言多えより取知りていとも御対面さき間いつの間も
和らぎ給ふるうらはしくおのどく御公達と御先又まきと伏見へ
御参りあり御心慮と仰さうせんといくま細のいざれとくは
てやまれどもさなが御身も湯りや押さしせんといふの御つゝ
う門むらと母はしつるおれ又伏見より幸苑をといる厄参りて
言多と盡し御登壇の候とともおまきとくは汝等先へ参れやそ
御出あえきはし給給御御出せよるといしりまきと二人と
御先へ参り給はしかまきと此のどく君達をいし給て御参り
とく伏見とさしと冷りたる二人の若の帰るを押しと御次の間は
たる本村岩陰坂御参近く進み出何とくうかく云甲斐さき御
まきとせ給ひしと只今伏見へ登壇いし御対面いしひしと道
まて雑兵のまに御命と落し給ふ死なうとい遠國へ流され給ひ御女
籍や若しうら御服さし給し迎しのがと給りぬ御命とついでを
せ給ふまや急ぎ伏見へ押させ戦場又御名取とい給へし死あ
け震活場又指落御門と城中へ切幸はしなり一まきへ給りて
右のうらまに弓引給ふといあえと給とわけ給ふまきと給り
河原邊の女とい若進とい出若陰坂の中をさうりまはれとい
廿二御心をめれたる軍まはし給せ給の御深敷一宮といまき

御親ひ世あるのる我を因て大君とて何の思ふるをありて死
我心と企むれたと人運心とさしてとむくも准り我より死へまや日本
六十余羽の諸神中には及びたとい梵天帝釈中には大天王も
何と病をうけ其心り内と誓いと立て除じ給へ徳音院謹
言多えより取知りていとも御対面さき間いつの間も
和らぎ給ふるうらはしくおのどく御公達と御先又まきと伏見へ
御参りあり御心慮と仰さうせんといくま細のいざれとくは
てやまれどもさなが御身も湯りや押さしせんといふの御つゝ
う門むらと母はしつるおれ又伏見より幸苑をといる厄参りて
言多と盡し御登壇の候とともおまきとくは汝等先へ参れやそ
御出あえきはし給給御御出せよるといしりまきと二人と
御先へ参り給はしかまきと此のどく君達をいし給て御参り
とく伏見とさしと冷りたる二人の若の帰るを押しと御次の間は
たる本村岩陰坂御参近く進み出何とくうかく云甲斐さき御
まきとせ給ひしと只今伏見へ登壇いし御対面いしひしと道
まて雑兵のまに御命と落し給ふ死なうとい遠國へ流され給ひ御女
籍や若しうら御服さし給し迎しのがと給りぬ御命とついでを
せ給ふまや急ぎ伏見へ押させ戦場又御名取とい給へし死あ
け震活場又指落御門と城中へ切幸はしなり一まきへ給りて
右のうらまに弓引給ふといあえと給とわけ給ふまきと給り
河原邊の女とい若進とい出若陰坂の中をさうりまはれとい
廿二御心をめれたる軍まはし給せ給の御深敷一宮といまき

増田 長 途 中 白 野 高 山 山 園



増田長途

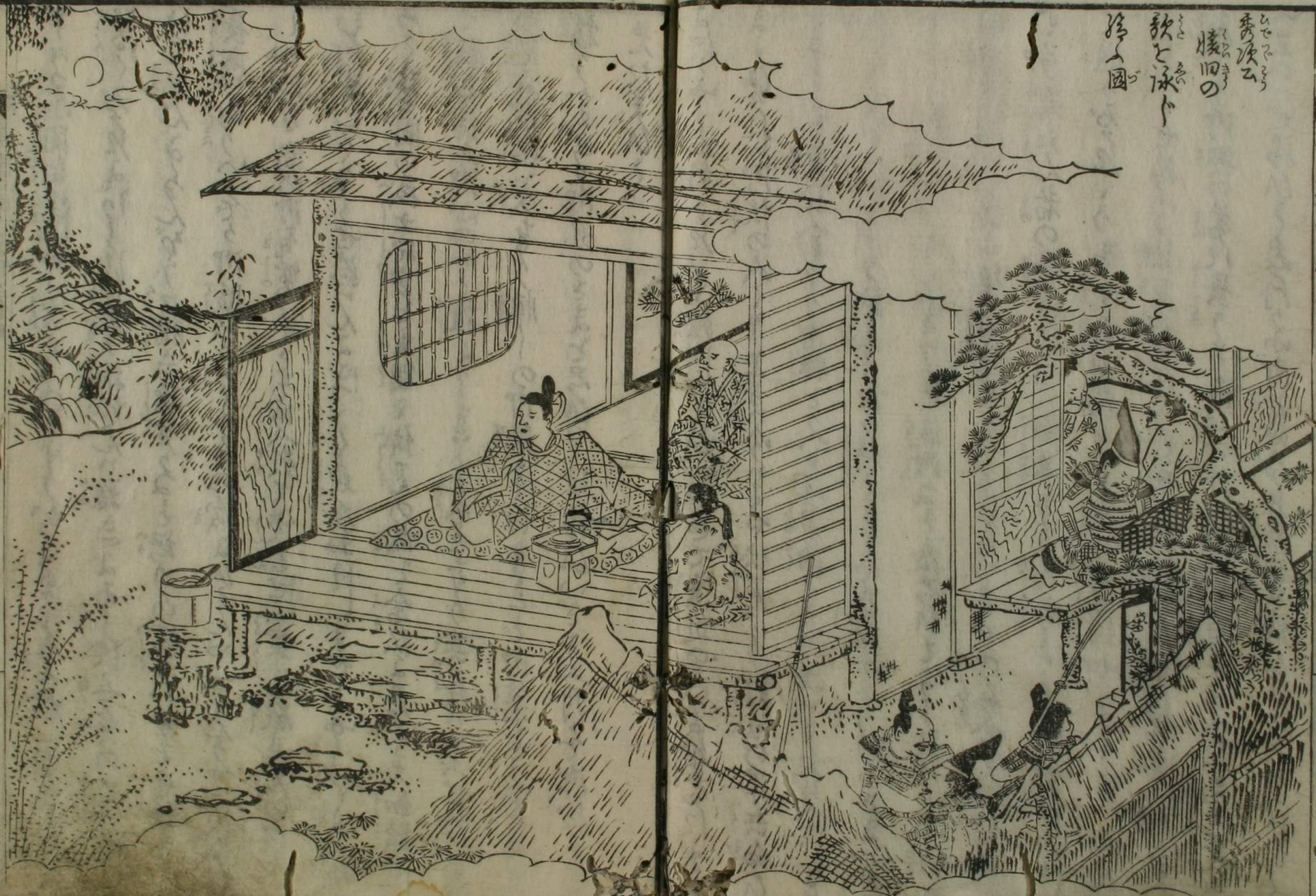
うかくのびく乃河ははよ及びいり忽ち推を河合戦よ及びい空し
是の石田増田が軍節をたを渡るらんともを河合戦よ及びい空し
取引なきこと存久呂何心く河系ありいんといよく河心も解を
流よどし今日し伏見へ押させ給ふ九右衛門を思の士とも百騎をいよ
護まぬらん味方多勢ありとも國の集り勢何の用よらまらん
く河合戦の事り給りぬ先よ河登城あり給らんしと理と護して渡
せればけ後を同じ給ひぬ東とらつとも河合戦よめされ何の事も隠後
つらふまてづらひとも槍長刀の石をともしと並く前後の河合戦三
余人也運られ伏見とせしと出給ふ

秀次公登る陣山

関白河合戦とてなやめ給ふは東の橋を打たれり大佛殿とていふこと

よ何と申ん勢されく護じくいしときて遠近の軍被たれり
まよひ給れば河合戦の人々やとるい今いとも伏見より討ひの軍兵向ひ
つらとこそ覺へし是より河合戦とて入され震落して河合戦されしと
渡しつらふよとより馳系りたる侍ともなや東よりりのあさまと見
くいん敵兵とてく入まりて還河合戦とてあひしとつらひとも河合戦
関白はしめして徳若流めよたつらつらとの無念さよとて
も弓矢をん若のふはしき河合戦車かり馬とてあるは蹴らし
て通るるれり乃を先着の森まて河合戦を急げやとくさくぬ河合戦
よてとせ給ふは伏見の方より増田右衛門尉長盛馳系り馬より
飛り河合戦の幕に長り右衛門尉の外の河合戦場とていん一先も陣山
へ去のせ給ひともつらふ河合戦心なれ給きと仰らつられりしと

いせの
秀次云
懐旧の
歌と詠
吟の國



中々不関白はしや君もよみてよりかくこそと覚悟しつゝいふ
驚くもたれまはしは只今後切人の難きよあはれに吾等の悪名を
けて死んぬらんがうは惜き次分ると怒りの涙はむせをせたまへ
長成盛なりいそぐ御殿のさうくまでの後まひまんや一せんやうに
月日古閑の御瓦質こそこそり入れて後世に輩も取ええの
し月まじくうせ給らん心つよく悲びおほしませとやうくや
つゝ秘園の武士に方と五圓と休見の機と余はよんく大和路に
て振き給ふ御心のやと推さうくまき長き方より其疾いづせ
の角は御輿と入る御懐の御膳さげきまこと御箸と入る給
移らるる御心のさまとどいつけ給ひいざよ月を御枕よ
先たまひく

押ひいさや雲舟の秋の夜うで折編まとの月と見んとは
かくらん泳ぐ給ひく望る日の暮方る山は列入給ひ本食真山と人の
方へ案内し給へい人勢さ急ぎ信入りさては只今の御登山と
そはしやうさうさう御のうらまゝと関白も後御社を教へ押
涙みせび給ひぬ其は目関白御給おし給ひく法名は道意禅門
と稱し給へせ御供の人にも皆皆と切て悔は後世善授といのの外
又よ地めいなりたるまは本村老隆女に哀落の御留るよ止りし
若の御心の心えり馬よまごうり又桑の摺と月入かまよまありたる
被さるるさまと見たりとるをうく竹田へ並は打出たるか
は鞍並たる馬まき引まきしとる兵にと並びてたや大の
と月入たるが老隆女歎してはあはしや我若とるて討きり

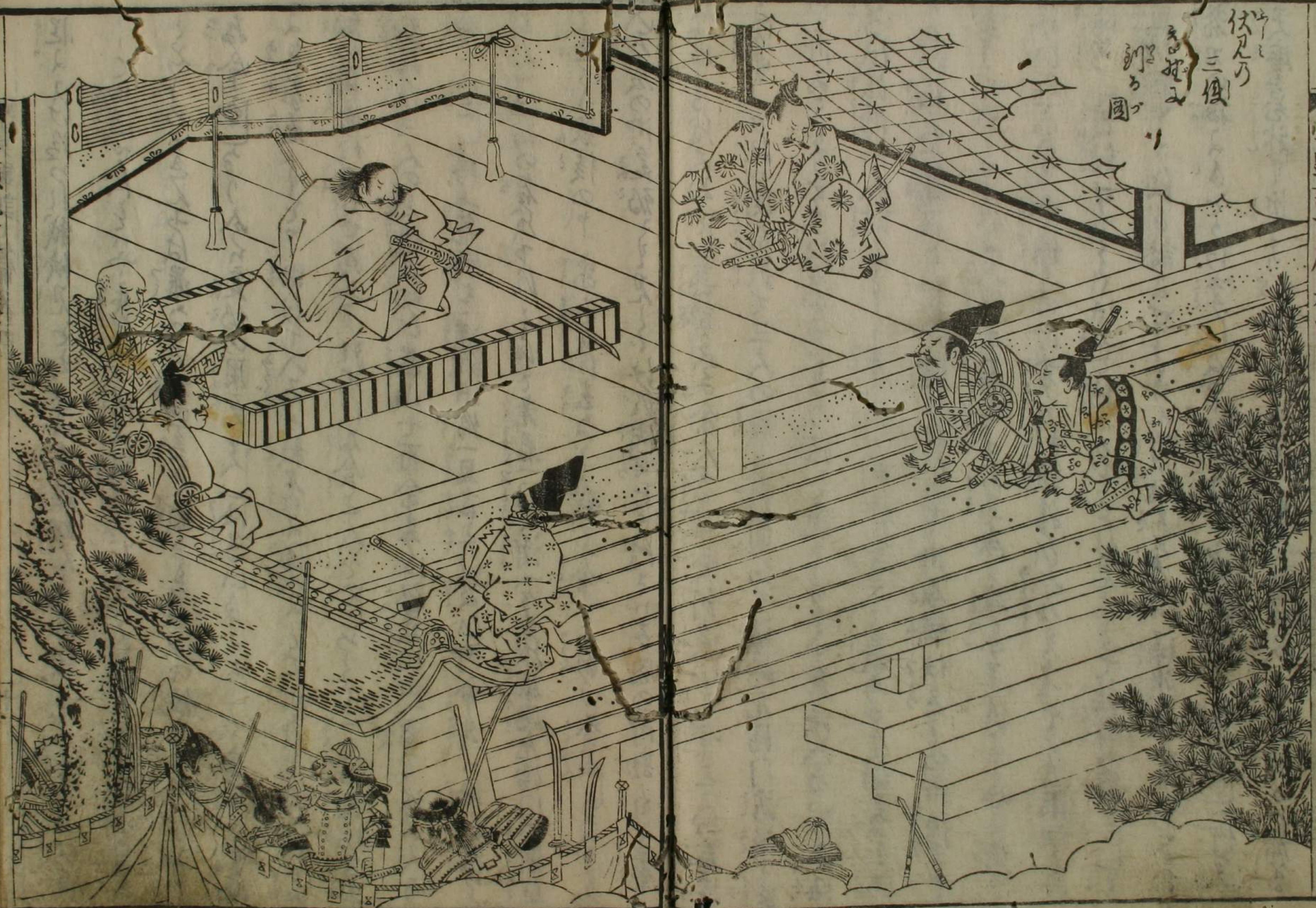


建中 陸
本村 左 渡 友
と 海 國

真蹟記七篇卷

是るるりゆ多し其の款は一支より一我其間をけり通る石田め
 又か合首をて後後切らばとてかけゆる心持中法といふ十九
 歳は後少小毒馬の口小とて是の物に狂ひ狂ふり摩鬼神のど
 勇とてげはし狂ふると先人殺を伏て待て少の難兵のふり
 大沈し狂りんそ口惜し是より山崎に打紙後に入て再び計畧を
 けし命とてぞ我に狂りて名とて沈し狂ふとてと押はしく流るる
 皆一日は後をよひてまより赤寺と西へ白明神のふりりもま
 と橋よとて伏見の中をいふは白殿なる所へ登山し狂ふとて
 さていひまて河命は別名はしいうふして河原に狂ふる先途を見
 多しせんとて又河原下人とも皆らうて又後少の只何きんを
 とぞ河原うらる文祿元年七月福徳丸浦門を後少右馬次池田
 藤守等瓜大ゆり其勢又余人多しとて河原に食と人の巻
 より多し丸が面白れて三人の俊は對面して後少丸浦門流堀は長
 つし河原にまうりたるを見まきり河を流して多し秀次入るいふは
 多し法師一人討んとて軍兵と別名はし乗て後少のまひるると
 なる後少右馬次さんい河原に丸ゆり河原に後少仕まとの河原を
 多りていと中法は入る及若年の右馬次が推系中法よと心は怒り
 後少三尺又寸金佛りの河原に引抜狂ひ入るるとしてより腹切人
 後少小首討せんとてけかと持てこれ見よとて指付後少日し
 再び物もまは討せんとてまん河原に丸ゆり後少丸に止め二人の
 若刀の揃よとてけまは及び討せんとて構しと後少に何なる
 天磨鬼神も道よりけりて見よなる暫くあて入る後少の餘る

貞観記七篇卷四



伏見の
三倒
御
御
御

真言七篇卷四

怪よりけりれ我快見とゆ其後腹切んと云いつつがよきこと終る
 して切腹せばとや秀次が身は湯りのりまごそ自害といふ事つ
 と云つてまゝせんは最なき者のまゝく殺さるるの便りて今ま
 存命あり今其功の用をばは多けりしと云はして其後
 又其家来むとや助けて入るが教書と傳ふよとて沖野とて沖野
 船の用をば及びせ終るる終るに本食と人をばせりて一山の老僧を出
 合給ひ三人の上候又向ひ嵩山七百余年の以来山に登り終る人の
 命と書し終る其例をばはけ候一旦言ふに及び沖野命斗の助け終る
 どんばけ山の名成りてその老若一日は沖へるが福徳老僧門に別進
 と云く衆徒の中をばはれまゝに我々命と書り登山しと云
 入る處の沖野船と見んとけ候時日と云門をばはるの所勤をばは
 切腹の付らふとてとて活はしき命と云候人の先我々首と斬て其
 後いふやうにと言ふとやそれいふとて居長も小僧討つるべきは候と
 見てきたる僧徒のやうに推て一言も云者なく及びけ退きたり
 秀次云以中書

危角のりよままぎれ其後と湯もゆくと十八日の己の刻と云ふは沖切
 腹と定りたる是まゝと消滅のありたる家長は山本を殿山田三十郎
 不破信恒藤部淡路守殿西を又人眞途まゝと沖野つらまゝとんと
 終る切腹の用をばはれんとて及面眼の涙を流し終る多う菊の中
 海を又人を美泉の下まゝに流し終る室は若世の若縁なりと小僧
 三人の我自らみ流しに得るは心志の不用とせよと終る山本
 石原山田三十郎不破信恒三人とて改を下げこゝろ雅く勿律と云次

園白
生客の
園の



真蹟証七篇卷四

十一

實をてこそ我く河成流り侍り河成よりとこそおのへどもさうの河成
 へあり三津原川の石川さ仕むしと三人一日より肌ぬぎ短刀と版
 実をてこそ小引まいせむる版河成といくも仕よりとこそ巻くも
 かけて討給ふ叔父けよと巻給ひ河成西軍流より巻れこのたす
 濡肌を版せ給へ兩人河成に謹でけて返付河成よあり心よく河
 成の巻くもさうのせくさげ巻くもれに右の巻くもて左の版後よ実を
 給ふを河成後へまり給ふ河成と討を侍給むしと三十一と一給
 して版より給き露のどく河成よとそらりれる續て河成も
 版よ実を切てお伏の河成身河成の河成と捨版の人よお後
 いどや河成小おくまうりとて短刀をよとて版よ二刀とて河成と河成
 推りて右のもかうけてさへ門と押落し首と抱きて死うり
 勇くしめりさう生家あり日十七日河成の河成其外後者の首も
 を伏見へお係し右の巻給ふ侍りさう河成人の首あり後代の見世
 めよ都へのはせ三條の橋よ侍り給むしと河成よ門と侍はしく河
 首と三條河成に巻よりさう先と見る京中の巻給男女あり人の系
 の定められたけいまく諸國の大小石にじつと給ひ何なり河成の
 候よさうまひ給むしと久しき悪逆のむらゝ巻くもさうやくもけいさ
 如形給ふも後の世のむらゝひ中よさうまひとさうまひと給ふ河成を
 憎くも備り本村巻給ひ山崎の室寺よ知れる侍りあされいさ
 よ河成を強く討給を何い給むしと河成の首の若けはしと侍り
 を強し河成さうんは後日いさる河成やあさるんよ急き伏見へ侍



徳吉大膳が
良者
殉死せんと
幸人園

真蹟記 卷四

十四

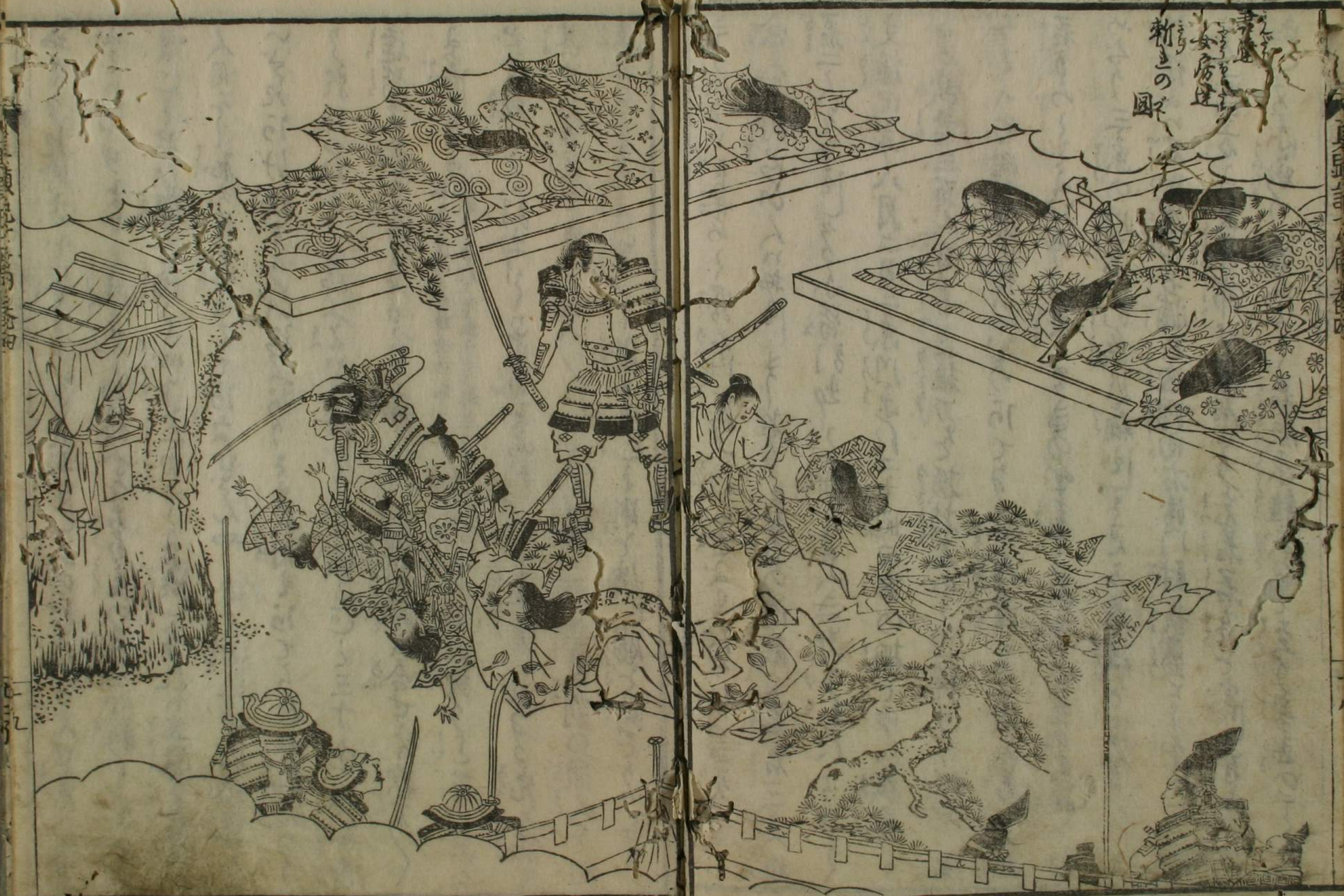
君達如房遠
引の



乃河治瓜吊ひきりてぐれに中層なるれが力は「能るを
汝等の心またぐい版切らんどの物も狂ひひりりし時と
してまじいれが時正なりと皆髪を削け方の育子あり河菩提を
吊ひきんと申後小大膳斜るに勢ひ於て客殿はしくいさだしく
切版しと配しりり其外白井後守の鞍馬の奥とて生座所
波重之ぬの業田にそ切版をどげ日比下守山に少雲一柳右近
等方こそて自害」當時の内は園白一家滅亡しりり何はまゝも
ん方こそなりりり

高生塚由来

秀次公のかられるきとあまて押しとるに東國録に示のよとま
はひの移いゝ名田宮勝とてうの女としりか名山名信也下守の
ミテいりく石集めとあまてしはし後よ世よとらるるき災は二平
余人を河とひい人の押しとるあり是等の河版よ若君三人姫
君二人を押しとる小指引却と斬する人き河と知れよりり
文禄四年八月二日三条川系に二十間四方の柵とゆい武器
とる武者三百人斗ち刀薙刀を扱持志のゆの尻より河系陣
をとりて時刻を待たぬかひ何てする女房達三十余人若君姫
君のらとまより申れ東とまきのをあせ二条二条の上と引
ゆぐり三条の川系も後以痛はしと見る者法をまかりはり
後役のり河治若浦三波増田右衛門尉長盛を先にして
すの西のより衣草布せ並居り先若君達と宮にまきと
あまの小形りゆと若殿系難とてまかりあまのこた



新
の
園
女
房
建

真
島
司
一
傳
春
四

新
の
園
女
房
建

真
島
司
一
傳
春
四



女房
達乃
尻を
埋む
園



